

第2学年C組 社会科授業案

場 所 2 C 教室
授 業 者 松山 貴久

1 単 元 米軍基地問題を考える（過去からの道しるべ）

2 深め合い、新たな自分を創る子どもの姿

基地移設問題に対する抗議の座り込み活動をとおして、沖縄戦に関心をもち追究していく。沖縄戦の事実を整理する中で、鉄血勤皇隊として少年兵が戦ったことに気づき、その証言にふれることで戦争に対する問題意識を高めていく。鉄血勤皇隊経験から沖縄米軍基地問題に取り組む大田昌秀氏にかかわることで、平和な社会をどう維持していくのかと自らのかかわり方を問い直していく。さらにどうなれば平和な社会となるのかを語り合い、その実現にむけて、より多くの人とかかわろうとする。

3 単元の構想

（1）社会科としての学び

本単元は、2年生の最終単元となる。「わかっていないこと」と「わからないこと」を整理する中で問題意識を共有し、自他の考えやその根拠としていることを検討することで、その問題点や解決の方向性を明らかにしていく。また、問い直しや見つめ直しの価値を自覚することをねらう。

前単元「交通網で変わりゆく地域」（地理）では、第二東名高速道路のIC開通にともなう額田地区の変容を取り上げた。子どもは、他地域と比較することで、高速道路のICがもたらす地域の変容をメリットとデメリットを整理しながら予測した。さらに過疎問題を抱える額田地区の人々のIC開通にける願いをとらえていった。

本単元では、歴史・地理・公民の総合単元として、沖縄県の米軍基地問題を考える中で、太平洋戦争での沖縄戦の実態を追究し、戦争を少年兵として体験した人の平和への願いに迫る。

普天間基地の辺野古移設は、連日のように報道されている。アメリカとの関係や、政府の対応の仕方を問う内容のものが多く見られ、政治的な駆け引きを強調しているかのようなのである。普天間基地移設に対して、ヘリ基地反対協によって13年間も反対運動が行われてる。戦争中、多くの恩恵をくれた海を、基地にしてはならないという戦争の経験をもとにした活動である。一方では、戦争で戦った経験のある元少年兵がこれまで語られることがなかった戦場の現実を高齢となった今、語り始めている。また、子どもは戦争はいけないこととわかっているが、戦争に対する切実感が高いとは言えない。そこで、沖縄の基地移設問題をとおして、戦争を見つめ直すことにより、次代を担う人間として、平和な社会のあり方を追究する。

（2）学びを深めるために

「みつめる」段階では、ヘリ基地反対協の座り込み活動を取り上げることで、基地移設問題に対して問題意識をもたせる。2058日にわたる座り込みや活動をはじめた人々の戦争体験を基にした移設反対の願いにふれることで、沖縄戦の経験が基地移設問題にかかわっていることに気づかせる。

「とらえる」段階では、太平洋戦争での沖縄戦がどのように行われたのかを追究していく。戦時中に行われたさまざまな統制や、学校での教育、政府の対応を整理することで、沖縄の人々が戦闘に巻き込まれていく様子をとらえていく。また、鉄血勤皇隊として、同世代の子どもが戦闘に参加した事実気づくことで、沖縄戦の実態を明らかにしなければならないと追究をする。

「かかわる」段階では、鉄血勤皇隊員の証言や大田昌秀氏の活動にふれることで、平和な社会と自らのかかわりを問い直す。鉄血勤皇隊員の証言によって、「守りたい」という隊員の願いとはかけはなれた現実気づくことで、戦争に対する切実感を高めていく。そこで、基地移設問題を振り返ることで、現在も他者に負担をかけることで、戦争のない社会や平和な社会が語ろうとしていた自らのあり方を見つめ直す。さらに大田昌秀氏の兵士としての経験や戦後の沖縄米軍基地問題への取り組みと未来への願いにかかわることで、平和な社会をどう維持していくのかと自らのかかわり方を問い直していく。

「つなげる」段階では、平和な社会の形成するために他者とかかわろうとする。これまでの学びを振り返ることで、どうなれば平和な社会となるのかを語り合い、その実現にむけて、より多くの人とかかわろうとする。

過程	学びを深める 教師のはたらきかけ	☐ 子どもの思い・考え ☐ 共有化された問題意識 ☐ 学びの深まり	教科の学び
み つ め る	①子どもの新聞記事スクラップの取り上げ 「受け入れ知事ゼロ」の記事をもとに、普天間基地移設問題についての意見交換をすることで、何が問題かを知らなかったことに気づかせる。	民主党がマニフェスト違反をしているのではないかと 普天間基地移設問題がニュースになっていた 防衛のためには基地が必要なのではないか 基地を受け入れることはできない 1時 基地を受け入れる知事がいないのは当然 騒音や事故があるとニュースで聞いた 他に移設してもまた同じことが起こる 移設する必要は本当にあるのか	
と ら え る	②ヘリ基地反対協の座り込み活動の取り上げ 反対運動にふれることで、沖縄の現状に気づく。さらに戦争時に海から恩恵を受けた人々の願いにふれることで沖縄戦とのかかわりに対して問題意識をもつ。	① 基地周辺ではどんな問題が起こっているのだろうか 2～4時 13年も移設に関する運動が続いている 辺野古の美しい海が埋め立てられる 基地で働く人や補助金が出ている 訓練中のヘリが大学に墜落した 反対運動を始めたのは戦争を経験した人 土地を利用したほうが経済的に有利 反対運動を続ける人には沖縄戦の経験が大きな影響を与えている	○歴史的事実の理解 ・太平洋戦争の経緯を時代を追って理解する ☆事実に基づいて自分の考えを述べる ・何をもとに考えを述べているのかを意識して自他の考えを吟味する。
か か わ る	③沖縄戦関連図書の整備 沖縄戦にかかわる図書を追究に用いることにより鉄血勤皇隊への気づきを促す。 ④鉄血勤皇隊員の証言 証言ビデオや電話での取材をとおして、沖縄戦の現実と迫ることで、切実な問題意識をもたせる。（大田昌秀氏の体験記の紹介）	③ 沖縄戦とはどんな戦争なのか 5～9時 学びの深め合い 14歳以上の少年が鉄血勤皇隊になった 旧日本軍は沖縄を時間稼ぎに使った 学校では軍事教練が行われていた 追いつめられた人々が集団自決した 壕の住民を追い出して、基地を準備した 重傷の兵士を外に捨てさせられた 沖縄を犠牲にして本土を守ろうとしたのだ	☆「わかっていること」と「わからないこと」を整理する ・追究で得られた事実を吟味して、問題を焦点化していく。
つ な げ る	⑤基地問題への振り返り 沖縄の基地問題をこれまでの学びをとおして振り返ることにより、現状を見つめ直す必要に迫られる。 ⑥大田昌秀氏との出会い 大田昌秀氏に授業を参観していただいた上で、平和への願いを語っていただくことで、次代を担う人間として平和をどう維持していくのかと自らのかかわりを問い直す。	⑤ 日本軍は沖縄をどう考えていたのだろうか 10～12時（本時11） 学びの深め合い 沖縄戦のように沖縄の人々に犠牲になってもらっている 基地をなくすために戦い続けている人がいる（大田昌秀氏） 本当は言いたくない事実も話してくれている 他に基地を移設しても同じ問題がずっと起こるはずだ 大田氏が言っていた生き残った人間の使命とは何だろうか 戦争になってしまおうとどんな約束も守られない 今の状況も沖縄を捨て石にしているのではないかと	☆他の考えを解釈する ・さまざまな立場の人々の意見をかみ砕き、どこが合意できて、どこができないのかを論点を明らかにしながら検討する。
つ な げ る	⑦平和への自らのかかわり方の模索 平和を考えることにより、多くの人とのかかわりに着目し、その実現に向けて動き出そうとする。	⑦ わたしたちの求める平和とは何だろう 13～14時 平和とは何かを多くの人とも話し合いたい 平和とは、奪い合うことではなく、分かち合うことだ だれかを犠牲にして平和を考えることはできない 何が平和な社会を乱すのかを判断し続けることが大切だ	☆他者に問い直しを図る ・問い直しの視点を明らかにして、問題を見つめ直す。

4 本時の学習 (11/14)

(1) 学びを深める子どもの姿

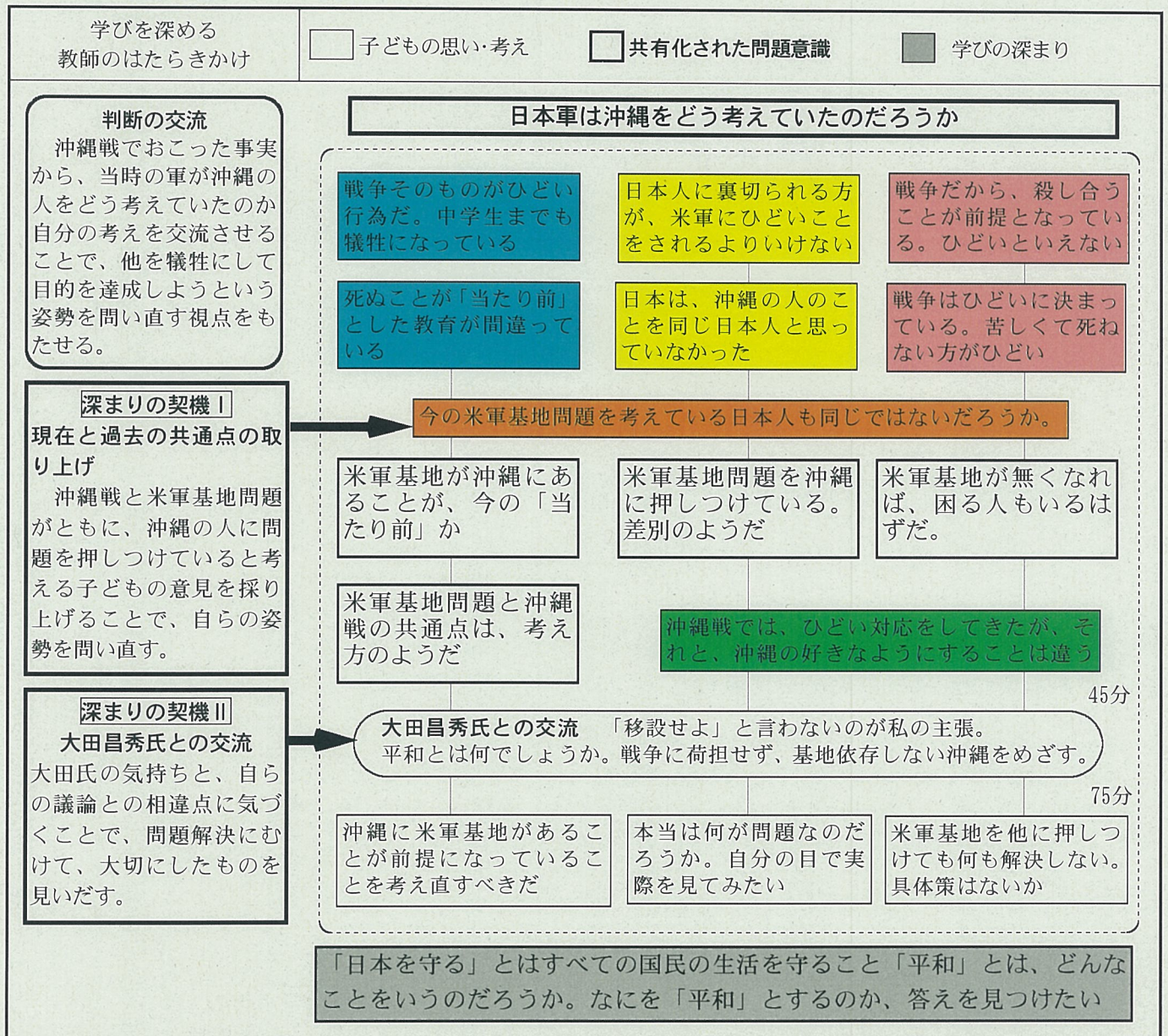
日本軍の住民への行為から沖縄の住民が捨て石にされたと考えるようになった子どもは、日本軍の戦略を否定するであろう。その中で過去の事実と現在の様子を比較することで、現在の自らのあり方を問い直していく。さらに、大田昌秀氏とかかわることで、大田氏との相違点を見いだし、譲れないものは何かを見いだそうと動き出す。

(2) 構想

■は、稲嶺沖縄県知事や大田昌秀氏に電話取材をし、基地問題にどう取り組んできたかを調べている。前時まで、「日本は沖縄を植民地のように扱っている」と発言した。また、授業後の教師との対話の中で、「今でも日本は沖縄に優越感があるのかな」と疑問を投げかけている。しかし、■は、この考えが、まだ漠然としていて、学級の中で理解されていないことに気づいている。

そこで、当時の日本や日本軍の行為をどう見るのかという判断の交流する。■の当時の教育を否定する考えや■の戦時下では何があっても仕方ないと主張する。現在の様子につなげて語ろうとする■の考えによって、子どもは、米軍基地問題と沖縄戦の共通点があるのか考えていくであろう。さらに、■が、移設では解決しないことを主張することで、自分たちの気づいた問題が、どう具体策に生きるのか問い直されるであろう。そこで、大田昌秀氏と出会う。大田昌秀氏が自らの考えをどのように見ているかに関心をもつであろう。その中で、大田氏の平和に向けての思いを聞き、同じところや異なることを見いだし、具体的に何ができるのかを追究しようとする姿を期待する。

(3) 展開 (100分)



今の日本は、昔からのなごりで、沖縄を差別していて、米軍基地を押しつけていると思う。なので、完全に沖縄県内から米軍基地を取り除きたい。	国のために死ぬのは昔なら当たり前。だから当時のひとはこれをひどいとは思わなかった。もしかしたら、今の私たちの当たり前が、将来ひどいと言われるかもしれない。	日本軍は、沖縄を日本と思って戦っていたのか？ 日本と戦ったのではないのか。日本と戦っていただければ、こんな戦いにならない。根本的に間違っている。	沖縄戦は、負けるにわかっていて、も、皇土を守るために戦ったのではないか。日本の植民地みたいな扱いで最低だ。	「皇土」に対して、沖縄を利用してある。今の日本は沖縄に米軍基地を押しつけている。よって、今も昔も沖縄を差別していると言える。	国の考え方、教育、地上戦であることや死ぬのが当たり前だったこと。中学生までもが犠牲になったこと。すべてがひどい。
やはり、ひどいことをしたのは、アメリカ軍よりも日本軍だ。それにしても、なぜ日本軍は、こんなことをしたのだろうか。	お国のためにと教育されているときでは、嫌だと言ったら裏切りになる。死ぬとわかって行動していた。自分を犠牲にしていた。	確かに、鈴木くんが言ったように、今でも、沖縄に対して、そのような考え方があって、そのようにならない。結局は基地を沖縄に押しつけて、本州に危険が及ばないようにしているように見える。	多くの人が死んでいるのに「時間稼ぎ」だなんて。時間稼ぎで死んでしまっただかと思うと、アメリカでなく、日本も日本人に対してひどい。	多くの人のために自分や自分の子どもを殺すようにする教育が問題だ。	私は、何がひどいのか未だに考えられない。それは「戦争＝ひどい」と思っているからだ。
中学生を戦争にかり出したり、「国のために命を捧げる」という教育をしていた国自体がひどい。同じ日本なのに、沖縄は皇土ではないから差別的な見方があったのだろうか。	矛盾がある。自分たちと同じ日本人として扱っていない日本軍のためには、本当に沖縄の人は戦うのだろ	沖縄戦では日本軍とアメリカ軍には明らかに戦力の違いがあった。それでも戦っていたのは、勝つことではなく、本当の目的は時間を稼ぐことだったのか。	何がひどいのか何度も問い返してみた。戦争だから身体的なむごしさはある。それに加えて、精神的な圧力とあった。他人からのものが想像を絶するものであったのではないかと考えた。（教育、時間稼ぎとして利用）	日本は沖縄戦で沖縄を荒らすだけ荒らしておいて、戦後は対応をしていない無責任な国。その後の対応をしておけば、米軍基地問題で苦しむことはなかった。	神の国日本、日本人は偉れている。こんな教育をした人は、日本がどうなるか考えたのか。その結果が、沖縄戦であり、米軍基地問題だ。今でも「沖縄遠く離れたところ」と思っている。
戦時中の当時は、ひどいことをした人もそのリーダーもひどいとは言えない。ただ、日本は沖縄戦が負けるとわかっていて、残した人にもつらさが残る。ひどいのは戦争をうして続けたのだろうか。	沖縄戦が負けるとわかっていて、国民の大部分が一言ひどい。国民をなくしてしまっただけ、残した人にもつらさが残る。ひどいのは戦争をうして続けたのだろうか。	沖縄戦をやめようと言え、やめられはす。変な見聞を取って、無くなるとよかつた命を犠牲にした。やめていければ、未来を担う子どもたちは助かっていた。	そもそもこれは、戦争なのだから、ひどくない所なんだけど無いです。それに苦しんで、死にたい人にとつて、手榴弾が不発で死ねなかったら、その方がひどい。	第32軍の命令で、1870人の男子生徒が動員されて、そのうち890人が戦死している。まだ子どもなのに殺されに行つたかのように。その教育の仕方がひどい。また人をロボットのようにつけていた	米軍基地を沖縄に押しつけているといっていた。しかし、他の県とわけあって意味がない。やっぱり沖縄につくるべきか。沖縄戦では、ひどい対応をしてきたが、それと、沖縄の好きなようにすることは違う。
日本が負けそうになったら、中学生まで動員する。こんなことをして、どう責任をとるのだろうか。死ぬのは当たり前と教えて、人間をロボットのようにつけていた。	負けるとわかっていてもやらないといけないときはある。本州への侵略を防ぐためにやっていたことは、わかっていた。しかし、中学生を巻き込むことはよくない。	沖縄戦を長引かせても、結局飛行場を占領されてしまう。これでは、多くの国民の命が無駄になってしまう。日本軍の方がひどいことをしている。	やっぱり、政府が沖縄を見捨てたんだ。皇土を守るためなら、沖縄が無土ともなっても、市民の命がなくなつてもいいと言っていることが伝わってくる。	人が人に手榴弾をわたしている。他人に自分の命が握られていて。米軍基地問題でデモを起している80歳を越えている人は、戦争を体験している。この過去の記憶について聞きたみたい。	今でも、皇土ではないからのような考えが続いている。かつて沖縄戦で苦しみ、今でも米軍基地問題で苦しんでいる。アメリカの都合ではなくて、日本の都合でいいようになっている。
日本人が中国人や、アメリカ人、アメリカ人が日本人を殺すことは戦争であれは当たり前。これはひどいことではない。	戦争に負けるとわかっていても、でるだけのことはやっておかないと、条約を結んだときに、日本が不利になる。だから中学生を用いてまで勝とうとした。つまり、鉄血勳皇隊やひめゆり隊はひどくない。教育も間違っていない。	沖縄では、絶対死ぬということをやらせていた。今の米軍基地問題も結局沖縄県内にとどめている。同じ日本なのに扱いが違う。	戦争だから、中学生が動員されることもあるかもしれないが、「死ぬのが当たり前」と教育されることがひどい。人の命をロボットのようにつけていた。	「ロボットのようだ」という考えに反感した。国のために死ぬことは当たり前前だと思っているから、命令のままに動く。でも本当はロボットではないはず。もつと人の命を考えるべきだった。	沖縄の扱いが今でも続いているというのには納得。沖縄は利用されているのかと思えない。
	今の沖縄の人の中には、「お国のため」と今でも思っている人はいらるのだろうか。とても気になる。	日本の沖縄への行為や見方がひどいと思つた。沖縄を時間稼ぎに使っている。その見方を、今でも日本政府が沖縄に米軍基地を押しつけていることにも影響があるのではないのか。	戦いと全く関係ない人を殺している。沖縄の人への偏見はある。私は、方言を汚いとも、変だとも思わない。	沖縄を犠牲にしてもいいというような、日本の沖縄に対する優越感の表れがわかる。これは、ずっと日本に根づいているのかもしれない。今も、米軍基地を沖縄に押しつけようとしていてるように見える。戦時中と同じだ。	このころ天皇は「人の命」をどう考えていたのだろうか。「命は天皇のものだ」という考え方がすこく気になる。天皇は悲しいと思つたことはないのだろうか。
戦争のひどさを主張する子ども 現在と過去を比較する子ども	戦争なので仕方ないと考える子ども	日本軍の考え方を否定する子ども 教育が間違っていると考えている子ども			